

我が調査した地域には、アデリーペンギンのルツカリーが三ヵ所あり、まさにペニンガを見ることができます。また、ルツカリーには必ずトウゾクカモメ（トウカモ）のつがいがありました。ペンギンの卵や雛を狙っているのでしょうか？しかし、ペニンガはトウカモを警戒

た。生命のたくましさと自然の厳しさを実感させられました。

観測生活、悲喜こもごも

アラストホブデでは、南極ならではの体験をしました。大陸からの風が台風並みに強く、地表付近は風に運ばれてきた雪で地吹雪状態、上空は青空、もちろん調査は風がおさまるまで待機です。



しているような様子はありませんでした。トウカモのつがいは、ルツカリーからかなり離れた場所にもいます。雛を育てているのもかなり目撃しました。いつたい何を食べているのか不思議でした。なにしろ周囲の海は氷に覆われており、海面の出ているところはほとんど無いのです。

調査地では、他に、たくさん他の種類と量のコケ、生きたアザラシを見、アザラシのミイラなどを発見しました。

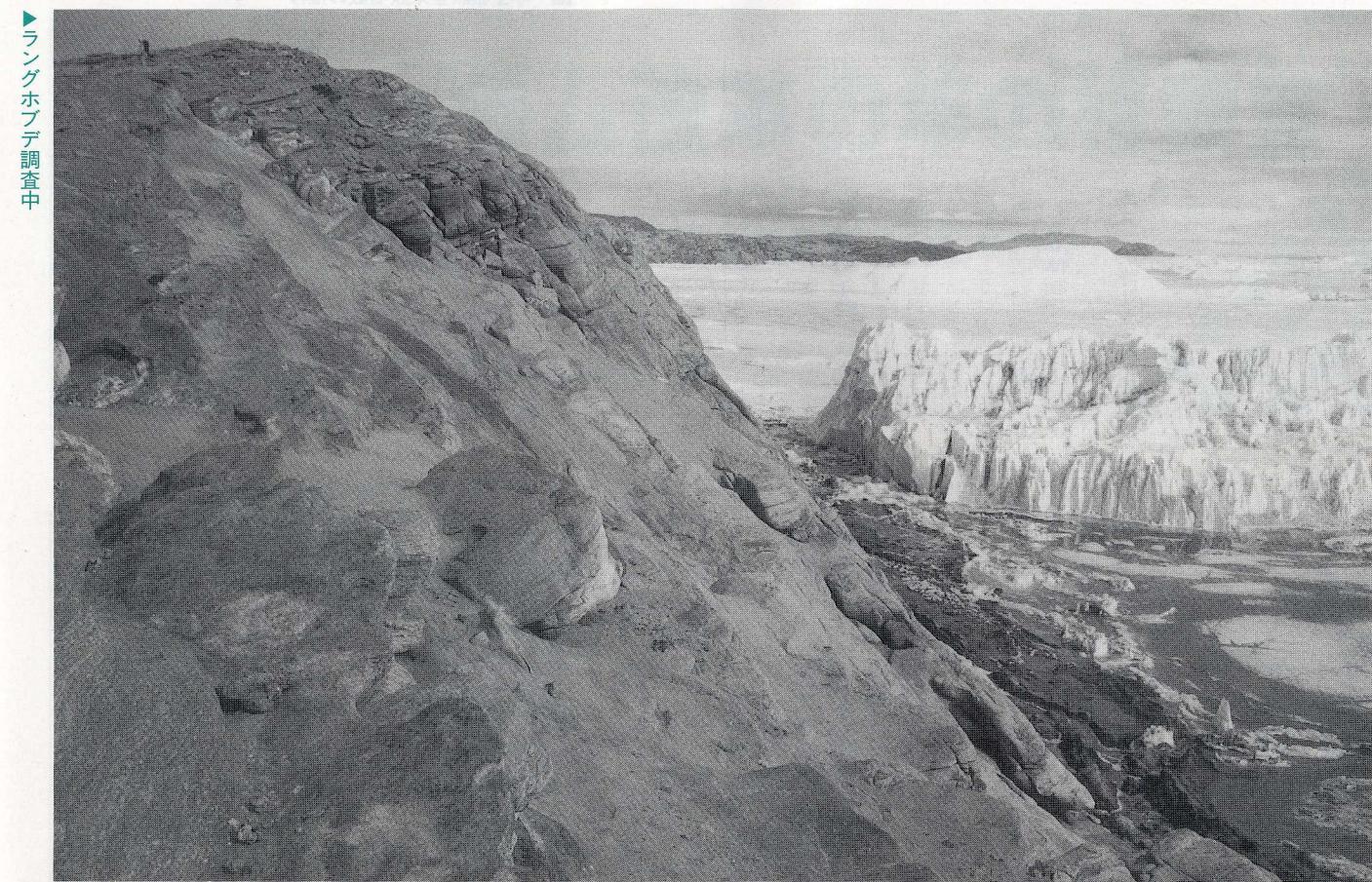
さらに、ピックアップの日になつてもへりが飛んできません。こちらの天気はよいのですが昭和基地は吹雪、逆に、こちらが悪天候というわけで、ピックアップがなかなかできません。残りの食料で最低一週間は食いつなげるよう献立を作り、一日二食で待機していました。じゃがいも一個半という食事もありました。幸い、明日から、一日一食という時にへりが飛んできました。かなり風が強く、よく飛んできただと思うとともに、実際に嬉しく、自衛隊に救助される人たちの気持ちを体験しました。

また、通信を行なうのが大変でした。通信状態がよくないので、アンテナ線をできるだけ地表より高くしようと、ピックアップ予定日からは、朝の六時から一～二時間おきに気象情報を通じなければならぬので、地吹雪の時は気象観測も大変でした。この時の交信で阪神大震災の報も入りました。この地域は、氷からの高さがなく、露岩間の距離や、調査地域のスケール間が狂ってしまいました。遠くにあると思えば近く、近くにあると思えば遠く、ということで、何度もルートマップの修正をしなければなりませんでした。このようなことや天候のことなどで南極の怖さも実感させられました。

最後に

アラストホブデでは、南極ならではの体験をしました。大陸からの風が台風並みに強く、地表付近は風に運ばれてきた雪で地吹雪状態、上空は青空、もちろん調査は風がおさまるまで待機です。

オーロラの極小期の年でしたが、リーゼルラルセンを後にしてすぐ、二日に



▶ラングホブデ調査中

第三十六次南極地域観測隊の一員として、昨年十一月十四日に晴海埠頭を出港し、約四か月半後の三月二十八日夕刻、成田空港に無事着きました。予定の観測地域には、調査日程・日数は別として、全て行くことができました。「開かれた学問」ということで原稿依頼を受けましたが、私の体験談を中心として、南極行動の紹介をしたいと思います。

「しらせ」での生活

まずは、「しらせ」での生活から紹介します。最大の特徴は、朝食、昼食、夕食、夜食の一日四食ということです。夜食は七時十分頃から、その後飲酒が許可されます。調査地に着くまで、海洋観測部門の人たち以外は結構暇なので、毎日のように飲んでいました。おかげで、出港して一ヶ月で四キロも太ってしまった。

一見無駄なようですが、我々観測隊にとって、観測がうまく行くかどうかがこれにかかっています。我々の観測は、「しらせ」の乗員の協力なしには成立しませんから、それぞれの部

門が、関係する分隊の人たちと飲みながら交流を深めるわけです。地学の場合は、ヘリコプターによる移動が命綱ですから、飛行隊との飲みが多くなりました。

調査期間中、体重は五キロも減りましたが、帰りの航海でたちまち調査前の体重に戻ってしまいました。

帰りの航海で最も辛かったのは時差ボケです。緯度の高いところを東経一五〇度まで移動するため、一日が二十三時間になってしまいます。たつた一時間ですからしばらくは何ともないのですが、東経一五〇度を北上し始める頃にいきなりボケができます。夜中の二時頃に目が醒めて、朝食を食べる時頃になります。無理矢理寝ても、起きていても直りません。起き直って、朝食が始まるとまで酒を飲んで騒いでいた人たちもいました。

S 16 (S 16)は、内陸旅行のための中継基地です。支援の翌日、遂に最初の調査地ラングホブデに飛びました。これ以降は、ヘリによる移動とテント生活がほとんどとなりました。

調査地での動植物

S 16 (S 16)は、内陸旅行のための中継基地です。支援の翌日、遂に最初の調査地ラングホブデに飛びました。これがこのようないくつかの経験をしてもらいたいと思います。皆さん、南極に行きました。

また、この体験を教育の場面にも活かしていきたいと願っています。

最後に、このような素晴らしい体験をさせていただいた関係各位に、深く感謝いたします。

南極観測を終えて

附属高等学校 ♦ 有田正志

